

浄

monthly
JŌDO

土

2・3

合併号
February-March 2004



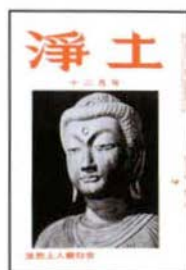
法然上人鑽仰会



昭和40年10月号



昭和40年11月号



昭和40年12月号



昭和41年1月号



昭和41年2月号



昭和41年3月号



昭和41年4月号



昭和41年5月号



昭和41年6月号



昭和41年7月号



昭和41年8月号



昭和41年9月号



昭和41年10月号



昭和41年11月号



昭和41年12月号



昭和42年1月号

寺院紀行

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

東京・目黒

本願寺

一月二十五日、浄土宗大本山増上寺で行われた御忌教書伝達式で、成田有恒台下から教書を拝受する本願寺渡辺幸雄住職。下は本願寺の山門と本堂





本願寺本尊は阿彌陀如来立像

本願寺本堂。人天蓋と前机は大工を営む総代の手作り



教書伝達式で教書を拝受した後、法然上人像の前で礼拝する御忌唱導師。中央が渡辺住職



下屋敷と呼ばれる寺町に本願寺はある。浄土宗西山深草派の寺が一か寺あるが、あとはすべて浄土宗の寺院だ



力強い口調が印象的な渡辺住職

故三木武夫元総理大臣が書いた本願寺の山号額。この額を書いた一週間後に総理大臣に就任したという



戦争で本堂、客殿は焼失したが、唯一山門だけが残った





本願寺に隣接する常光寺に残る史跡、「福澤諭吉先生永眠の地」。かつてはこの地は本願寺も管理する共同墓地だった。



福澤諭吉の戒名が記されている本願寺過去帳。戒名は大観院獨立自尊居士



近くにはブラチナ通りの名で知られるようになった白金台の街並みが広がる

法然上人
鑽仰会

公開講演会概録

江戸 お寺 庶民と

前編

田中優子

法政大学社会学部教授



ご紹介にあずかりました田中優子でございます。よろしくお願いいたします。今日は、江戸時代でも大変な勢いを持っていた増上寺さんにお招きいただきまして、本当に光栄に思っております。

今日は「江戸庶民とお寺」という題で話をさせていただきますが、私は江戸時代のことを、生活だけではなくて浮世絵や文学などさまざまなところから見ておりますので、そのような話も混じってくると思います。できるだけわかりやすくお話ししたいと思っておりますのでよろしく願います。

増上寺さんと聞いて、私が最初に何を思い浮かべるかといいますと、広重の浮世絵です。広重は『名所江戸百景』という晩年のシリーズの中で増上寺を描いています。

江戸時代は出版物や浮世絵が大量に出ています。絵と申ししましても、ただの襖絵とか屏風絵だけではありません。むしろ印刷されている絵のほうが多いくらいなんです。ですから、

ら、その数が多いです。それから、本の形になっていても中を開けると絵ばかりという本が大変多いんです。それほど目で見える文化が発達した時代なんです。

ですから、そういう意味で江戸の中を案内するために浮世絵師たちはずいぶん絵を描きました。当然、増上寺というのは江戸時代大変な名所ですから、「名所図」となったら必ず出てくるところなんです。

私の印象に残っていたのは、さっき申し上げた広重が晩年に書きました『名所江戸百景』です。これは「百景」ですから百枚あると思うと、実はもっとありまして、百枚以上の非常に長いシリーズなんです。

このシリーズの中に増上寺が二枚描かれているんですが、その一枚はこの増上寺の五重塔の塔の上から描いたものです。塔の上から赤羽橋の方向を描いておりますので、その題名が『増上寺塔赤羽』という題名になっています。赤羽川という川が流れ、そこに赤羽橋

浄土

2004/2・3月号 目次

カラーグラビア 東京・目黒・本願寺.....写真=タカオカ邦彦	1
講演概録 江戸庶民とお寺.....田中優子	6
寺院紀行 東京・目黒・本願寺.....真山 剛	14
表紙のことば.....石川忠夫	23
梵字⑥.....真野龍海	24
代替医療という世界 最終回.....井上朝雄	26
会いたい人 安野光雅①.....関 容子	28
響流十方.....林田康順	36
連載 法然上人をめぐる人々.....石丸晶子	40
Jフォーラム.....	47
浄土誌上句会.....選者=増田河郎子	48
マンガ「さっちゃんはネッ」.....かまちよしろう	51
編集後記.....	52



表紙題字=浄土門主 中村康隆猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

がかかっていたんですね。そして、この五重塔の一番上のところを半分だけ描いています。右のほうに半分だけ入れて、そこから下のほうを見ているんですが、そこに赤羽川が見えて赤羽橋がかかっています。

赤羽橋を渡った向こう側にずっと長く壁が続いている部分があります。これは九州の久留米藩の上屋敷です。つまり久留米藩邸になります。久留米藩主有馬家のお屋敷があつて、そのなまこ壁を描いているんです。この有馬家のお屋敷の中には非常に高い火の見やぐらがあつたのですが、これが江戸で一番高かつたそうで、その火の見やぐらが絵の中に見えています。

なぜそこに江戸で一番高い火の見やぐらがあるかというと、実はこの有馬家の藩邸は、増上寺を守る役目もあつたんです。ですから、一番危ない火事から守るため、増上寺とその周辺をずっと火の見やぐらから見張るといふ、とても大事な役目を持っていました。と

いうことは、このお隣のお屋敷とこの増上寺さんとは大変深い関わりがあつたということなんですね。

これはなぜかといいますと、もちろんこの増上寺さんが徳川家の菩提寺だからで、江戸の体制にとっても大事なお寺であるとともに、江戸の庶民にとっては憧れの的ですよ。東照宮にまでは行かれないけれども、増上寺だつたらお参りできますから、たくさんの方がお参りしていました。

そして、この『名所江戸百景』に描かれている増上寺のもう一枚の絵というのはお参りの絵なんです。その当時の参詣ツアーなんです。参詣ツアーといつてもいいと思います。一人二人ではなくて、まとまって何十人と参詣します。ですから、これは参詣を終えた人たちが正面のところから集団で出てきたところを描いた絵になっています。

ちょうどそのときにお坊さんたちが十人ほどの塊でその後ろから歩いてきているシーン

なんです、このお坊さんたちは何かといいますと、托鉢に出て行く増上寺の修行僧たちです。お江戸日本橋七つ立といいます。これは午前四時ごろのことを指すんですが、実はこちらの七つというのは夕方の七つです。参詣客が帰るころですから、朝ではなくて午後のほうですね。午後の四時ごろに、この托鉢僧たちが托鉢のためにお寺を出発するんですね。その集団も描かれています。

この増上寺のお参りを終えた旅人たちが一体どういう人たちなのか、絵からはわからないんですけど、ちょうど十八世紀の後半、江戸時代の真ん中ごろから幕末にかけては、ものすごい人数の参詣の人たちが全国を歩き回っています。江戸の人たちかもしれませんし、江戸の郊外の村からやって来ているかもしれません。あるいは上方のほうから来ているかもしれません。そこまではわからないんです。しかし、そういう参詣客が江戸にもやって来ていた。そしてこの増上寺を参詣して

いたということは間違いありません。

参詣の人や修行僧たちを描いたこの絵の向こう側には大門が見えるのですが、それだけではなく神社も見えます。そうですね、芝神明が見えています。ご存知のように、江戸時代は、お寺と神社は一緒にあり、いつも隣り合っていました。これはどこに行ってもそうだったんです。明治維新以降分離されますので、別々になってしまいましたが、それまでは大抵お寺と神社は一緒にありました。

『名所江戸百景』の増上寺の絵はこの二枚ですが、『名所江戸百景』は本来に江戸の風景画の中でも傑作といっているんです。どの絵をとっても面白い。この増上寺さんを描いた絵もそうですが、先ほど申し上げた五重塔が半分よりちょっと多めのところではつきりと切れて、右半分が描かれてない。ちょうど画面の一番右側のところに半分だけ見えるという形で描かれているんですが、この『名所江戸百景』というシリーズは、そういう描き方を

するシリーズなんです。

何をとっても途中でばっさり切っちゃう。丸ごと全部見えるという描き方は絶対にしないという面白い浮世絵師なんです。たとえば、人間を描くとき、大体三分の一くらいしか描かない。それから、ほんのちよっと袖がチラッと見えるとか、かんざしだけチラッと見える、といった描き方をするんです。

皆さん多分ご覧になったことがあると思う

田中優子（たなか・ゆうこ）

法政大学社会学部教授。日本近世文化、アジア比較文化、近世文学、江戸時代文学専攻。江戸時代の美術、生活文化、海外貿易、経済に精通し、東アジアと江戸の交流にも造詣が深い。主な著書に『江戸の想像力』筑摩書房、『江戸の音』河出書房新社、『近世アジア漂流』『江戸百夢』朝日新聞出版、『江戸の恋』集英社新書などがある。



んですが、『はねたのわたし弁天の社』なんていうのは、船頭さんとすね毛しか見えない。足がニョキッと出ている、その船頭さんが權を操って、その權がバツと見えるんですね。これしか描いてないんですよ。ところが、それしか描いてないために、この浮世絵を見ている人はなんだか船に乗っているような気がするんです。自分が船にいて目の前に船頭さんが立っていて權を操っていると、当然そこ

に足しか見えませんよね。そういうふうを描いているんです。ですから、とても臨場感があります。

この『名所江戸百景』の中でもう一つ面白いのが日本橋なんです。日本橋の欄干しか描いていないという絵があるんですよ。ところが、よく見ると、この絵の右の下の方のほうにチラッと魚屋さんの桶が見えるんです。天秤棒を肩に担いで魚を売る魚屋さんですね。その桶が見えるんです。それで、桶の中を見るとカツオが入っているんです。さらによく見ると画面のところに天秤棒から桶を下げている綱がスッと見えるんです。でも、橋の欄干とそれしか見えないんです。人間は全然見えません。

ところが、それを見た人はどう思うかというところ、「ああそうか、今魚屋さんが目の前を通り過ぎたんだな、通り過ぎちゃったから魚屋さん自身は見えない、魚屋さんが通り過ぎたその瞬間なんだ」と思います。そしてよく

考えてみると、この日本橋の欄干の向こう側に江戸橋が見える。そうすると、この方向がだんだんわかってきて「ああそうか、画面の左側が魚市場」。そして、向こう側が東側で、その東側の空が赤くなっている。「ああ、夜明けなんだ」。さらに、魚を見るとこれがカツオである。ということは初鰯ですね。初鰯の季節の夜明けに魚屋さんが魚市場で魚を仕入れて「さあ、これから町に売りに行こう」とすごい勢いで目の前をピュッと通り過ぎたその瞬間を描いたんだけど、あんまり速く通り過ぎたもんだから、魚屋さんの姿が見えない。

なんだかこれってすごいんですよ。スナッブ写真みたいでしょ。魚屋さんを撮ろうと思ったら、バツと通り過ぎちゃった。だからシャッターを押した瞬間にはもうそこにはいなかった、っていうような絵を描くんです。そうすると、それを見た私たちの想像力が働かされて、魚屋さんの仕事ぶりがわかる、季節

がわかる、時間もわかってくる。広重の絵と
いうのはこうやって一枚の絵の中に季節、時
間、動き、それから、場所の空気まで取り込
むんですね。

それが江戸の百以上の名所にわたって描か
れています。しかし、名所の数としてはもっ
と少ないです。たとえば、日本橋は何枚も描
かれています。でも、いくつもの名所、百以
上の光景にして、風景も時間も入れながら描
いている、こういう傑作ですよ。そして、
そういう傑作の中に増上寺の絵もあるもんで
すから、江戸の庶民はこうやってしょっちゅ
う増上寺さんにも参詣して、ここの空気を味
わっていた、楽しんでいたということがわか
ります。

実際に、江戸の庶民たちはよく参詣します。
これは、さっき言いましたように、寺社が一
緒にくっついているということが多いので、
お寺に行く場合と神社に行く場合のどちらも
あるんですが、たとえば、曲亭馬琴の奥様。

馬琴日記を見えますと、なんだかほとんど
毎日お出かけしているんですね。「今日はど
こどこに参詣」、「明日はどこどこに参詣」な
んですよ。息子がちよつと病気がちだったん
ですね。息子のためにお参りしてくるという
と「だめだ」とは言えないわけです。

そうしますと、参詣とか祈願に行くとい
うのを口実にしてちよつと外に出られます
よ。それで散歩をしてきてしまう。お友達と
会ってお茶を飲んできちゃう。ご飯食べてき
てしまった。お買い物してきたこともありま
す。そういうように江戸庶民たちのお参りは
一つには口実なんです。しかし、この参詣そ
のものがとてもいい散歩だったというふう
にいえると思います。

さて、この『名所江戸百景』ですが、よく
数えてみましたら、絵の中の八割に必ず水が
見えるんです。これは川の水、海の水、池の
水などいろいろですよ。たとえば、赤坂に行
くと溜池という場所がありますが、あそこ

には本当にものすごく大きな池がありました。それから、今高速道路が都心にたくさん通っていますね。あの高速道路の下がほとんど川でした。

ですから、縦横に走っていた運河がすべて埋め立てられていくわけです。隅田川のような大きな川はそのままになっていますが、非常にたくさんさんの運河が埋め立てられました。今私たちは東京の中を歩いていても「東京は水の都だ」なんて思いませんが、広重の『名所江戸百景』を見てみると「そうか、江戸は水の都だったんだ。そして、江戸に住んでいた人たちがそう感じていたんだ」ということがわかります。

海も相当埋め立てられてしまいましたよね。当時は、海辺に出るのはとても簡単でした。たとえば、霞ヶ関の官庁街の上のほうから坂の下を見たとき海が見えたんです。今はもちろん見えませんよ。

それから、水が見えると同時に、いろんな

ところから富士山が見えました。これは地名に「富士見」という地名がついていることからわかりますが、江戸で第一の富士の名所は日本橋三越前です。その向かい側に旧三井銀行の建物があるんですが、この二つの建物の間から西を見るんです。そうすると、その一番突き当たりに富士がそびえています。ここは富士の名所です。名前は「駿河町」といいました。

当時は両方とも越後屋さんです。三井越後屋、つまり三越ですね。そういう富士の名所はいろんな絵師が描いています。三越のころの富士の名所は絵の量としては一番多いと思いますが、それだけではなくて、江戸の至るところで富士が見えました。江戸という都市は、建物のモニュメントというのはいませんが、その代わり富士が江戸の象徴になっていたんですね。

(つづく)

寺院紀行

東京・目黒

本願寺

撮影／タ力才力邦彦

文／真山剛



本願寺本堂

ここに一枚の地図がある。「御参拝案内図」と題されたB5版のカラー地図で、左右には目黒通り、桜田通り(国道1号線)、そして首都高速2号線が走り、その中央にお寺を表す卍印がかたまっている。卍印は全部で九つ。そして、その間を縫うようにせまい道路が通っている。実際に車で訪れると、目黒通りからの入り口の道がかなり細い。住宅街をしばらく行くと、ズラリ九か寺が並ぶ案内板が立っている。今回訪れるのは、左の矢印で五か寺並ぶ上から二番目、本願寺である。

まるで迷路を思わせるような一角だが、ここは通称増上寺下屋敷と呼ばれる寺町で、八か寺の浄土宗寺院と一か寺の元天台宗、現浄土宗西山深草派の寺院が江戸時代から昭和にかけて集まってきた目黒の高台の一角だ。

本願寺でいただいた上大崎浄土宗寺院群一覧という、下屋敷の浄土宗寺院紹介のチラシの移転事項のところを見ると、五か寺がもと狸穴にあったお寺である。今回訪問した本願寺は鷺之森に慶長十一年に創建され、その後狸穴から麻布本村に移り、天和四年にこの地に移ってきた、下屋敷浄土宗寺院の中では一番の古刹である。

現在の住職は第二十四世渡辺幸雄住職で、この四月には大本山増上寺での御忌の唱導師という大役を務める。

御忌とは、わかりやすく言うと浄土宗の宗祖法然上人の年忌法要



寺町だけにお墓が密集している。
右横が本願寺

のことである。そして増上寺の大殿（本堂）の高座で導師として法然上人の供養のために私子^{ほっす}を振り、読経できることは浄土宗の僧侶としての本懐といっても言い過ぎではない、大きな舞台なのである。

御忌の唱導師の役に当たると、まず一月二十五日に教書を増上寺の法主^{ほっす}（住職）から伝達される。その後二月から三月にかけ三度の習礼がある。習礼とは実際に増上寺の大殿で本番と同じ立ち居振る舞いをする練習のことである。普段の自分のお寺での読経とはいささか、いやだいな様子^{ようす}が異なる。それだけに僧侶としては年季の入った方々がその役に当たられることが多いが、こうした練習を重ねられるのである。本誌でも何度かこの御忌唱導師の取材をしてきたが、この日のために体力作りされる僧侶も少なくない。氣力と体力が必要とされるのである。と同時にもうひとつ、氣を遣うことがあ^ある。当日、法要に参列していただく僧侶や、お祝いにかけてくれる知人への引き出物である。

「お寺さんは交流が長く、仏具関係の物はもう揃っている。そこで色々考えたけど、お仕立て券付きのワイシャツにしたよ」

最初の取材の時にはワイシャツでいいかまだ迷われていたが、二度目の取材の時には既に決まっていて、渡辺住職はこう続けた。

「迷ったら慣習に従うのが無難なんだろうが、私も色々もらってきただけど、どうしても仏具関連の物になる。だけど私の時は敢えてそ

福沢諭吉がこの地に永眠したいと思った理由は、富士が見えること。そして慶応幼稚園を創設した和田義郎がここに眠っていたからだという。その記念碑も常光寺に残っている。



うではない実用的な物にすることにしたんだよ」

さて、敢えて慣習にとらわれないこの思い切りはどこからきているのだろうか？

「私はもともと山形の出身でね、男ばかり五人兄弟の四番目に生まれたんだな。裕福な家ではなかったし、母がお寺出身で自分が生まれ育った曹洞宗のお寺に出したんだな。八歳の時だった」

今年で七十八歳になられる渡辺住職だが、子供の頃のことを良く覚えていた。「お寺に入るって言っても、親戚の家だからね、毎日遊んでいるようなものだったよ(笑)」。このままではむずかしいと親も思ったのか、二年後には親戚ではない浄土宗のお寺に預けられる。

「新しいお寺は親戚のお寺と違って大変だった。一に掃除、二に掃除、三、四がなくて五に掃除だよ。お寺でご飯を食べるときも廊下で足袋なし。山形では雪焼けと言うんだけど、冬はいつもひどい霜焼けだった。たまたま同じ学年の小僧が他に三人いたから、励まし合ってたのかやってこられたけど、それは厳しかったね」

渡辺住職の入ったお寺は同じ山形の本覚寺という浄土宗名越派の別格本山で、その住職の弟さんが、現在住職を務める本願寺の斜向かいの戒法寺の前住職だった。

「本覚寺には僕たち小僧の他にも兄弟子が四人ぐらい、それに住職と爺やと婆や。大所帯だから小僧の僕たちは、朝から檀家さんの家



プロ野球会で活躍した三宅家の墓。
初代巨人軍の監督で水原や三原を育
てた三宅大輔氏が眠る。



本願寺総代で大工の棟梁だった久保田さんが自分で作り寄進した人天蓋と前机。どちらも素晴らしい仏具に仕上がっている



を回ってお経をあげ、そして朝ご飯を食べさせてもらう。お昼の弁当は寺に帰ってから自分たちで詰めるけど、学校から帰ると、夕方からはまた檀家さんの家へ行く。お経をあげ、今度は晚ご飯をご馳走になる。行く家は決まっていたけど、昔の田舎のお寺はいろいろな意味で大変だった」

その後、山形二中、現山形南高校に進学し、お寺から通った。そんなある日、こんなことを母親に尋ねたという。「男の子ばかり五人なのに、何で四番目の僕をお寺に入れたのか」。お寺出身の母は躊躇なくこう答えた。「子供のうち一人は坊さんにしたかったのだけど、お前がお釈迦さまと同じ誕生日だったからだよ」。母の淀みない答えに納得した渡辺住職は、いつかはお寺に入りたいと思ったという。

中学卒業後は航空隊に入った。千葉の柏、茨城の那珂湊、群馬の前橋と首都防衛の任に就き終戦を迎え、昭和二十年の十月に帰還した。渡辺住職は内地を離れることなく終戦を迎えたが、三人いる兄のうち二人は戦死されている。

戦争で遅れたものの、大正大学に入学し専門部で仏教学を学ぶ。本覚寺の弟子全員が大学に入ったわけではないが、山形二中出身の渡辺住職は進学を許されたのである。上京ということになり、東京での住まいは本来は戒法寺になるはずだった。しかし、下屋敷は戦火で焼け野原。そこで大正大学の寮、明照学舎に入った。

そして在学中の二十四年五月に結婚。戒法寺住職の世話で本願寺の婿に入り、細谷姓から渡辺姓となったのである。翌年には現在増上寺に勤める長男裕章さんが生まれる。そして二十六年に大正大学を卒業するが、ここで大きな方向転換を迎える。

「当時の本願寺は檀家が百軒ぐらい。今は大分減ったけど境内地が広くて家作の収入があった。だから先代は無理に檀家を増やさず、お寺としての仕事は忙しくなかった。寺にいてもしかたがないから外で仕事を探そうとしたんだ」

渡辺住職は人に勧められるまま全国社会福祉協議会の児童部に勤務することになる。ここで渡辺住職はララ物資と呼ばれたアメリカからの戦後日本の救援物資に関係する仕事に就く。会長が十七代にあたる徳川家正さん、理事長が田中法善さんという浄土宗の僧侶。ロスアンゼルスに永住した杉町さんという方が戦争未亡人救済のために設立した日本婦人友援会から送られてくる物資の加工などをする仕事である。授産所と呼ばれる工場で、未亡人が働き手となり送られてくる物資を靴下などに加工するのだが、そうした物流から就労など一切を仕切る仕事である。

「面白かったね仕事。忙しかったけれど全国を飛び回りながら日本の再興のために尽くすんだからね。それに徳川会長には大変可愛いがられたし、本当に立派な方だったね。徳川さんから三木睦子さ

山の手白金散歩と記された案内碑に
本願寺の名前が出ている



んに会長が替わり、三木さんとも交友を結べてね。うちの山号額は
その縁で三木元総理に書いて頂いたんだ」

その仕事も日本の戦後の復興と共に、所期の目的を果し、昭和四
十年に終りを告げたが、ここでまた渡辺住職は転機を迎える。

三十八年四月、府中に日本で始めての重症心身障害児の施設、島
田療育園が新設された。その経営母体である日本重症心身障害児協
会の事務局長への就任要請である。勧めたのは田中法善理事長。田中
理事長も村田、丸井両師同様、お寺を持たない浄土宗のお坊さん。お
寺のある渡辺住職とは知りながら、その能力を買っての要請だった。
「今度は迷いましたね、どうするか。でも結果的にはお寺より仕事
を選んだ。三十代後半、仕事に熱中する年頃だな。しかし今考える
とお寺を留守にして社会福祉の仕事を続けられたのは、近隣のお寺
のご住職のおかげと、家族の協力だけが、何といってもお檀家の深
いご理解と愛情の賜であると感謝している」

こうして今度は重症心身障害児の仕事に就く。とはいっても自ら
が障害者の面倒を見るのではない。それまでの心の障害か体の障害
かいずれのみを対象とした障害児施設に入れない、当時三万人いた
心と体両方の障害児を受け入れる体制作りの仕事である。

「実際には寄付金集め、パンフレット作り、そして事務局長として
経営者側として団体交渉にも臨んだね。当時は労働組合が強くてね。



目黒通りの反対側には元朝香宮邸の
国立科学博物館所蔵の自然教育園が
広がる

そうだな、経本より労働三法のほうを勉強したかな（笑）」

結局この仕事を六十歳まで続ける。昭和五十九年のことだった。今でも昔の仕事の関わりが切れているわけではない。重症児施設秋津療育園の幹事、養護施設野の花の家の理事を勤めており、社会福祉の道から足をあらうことはできない。民生委員は二十年余、定年まで勤め、また地域とのつながりも深く、現在上大崎連合町会長、大崎第一地区青少年対策委員会会長も勤めている。

「一般社会なら定年で第二の人生を楽しむ時から、お寺の仕事に付いたわけで、むしろ息子の方が有名だよ（笑）。まあ今でこそ少しは顔を覚えてもらっているけどね」

そう言う渡辺住職だが、今回で三期目を迎える宗会議員という要職に就いている。宗会議員とは国会議員の浄土宗版である。

話を戻すが、こうした経歴の住職だからこそ御忌の引き出物選びなのである。戦後日本の復興を社会福祉という視点で見続けてきた渡辺住職の一面がこうした形になっているのである。

現在は三百軒となる檀家さんを抱える本願寺だが、浄土宗僧侶としての一世一代の晴れ舞台がこの御忌唱導師である。

「増上寺の大殿というのは特別だね。伝達式や習礼であがると、身が引き締まり感激するし、なにより緊張が解けないんだな」

唱導師を終えられてからのお話が楽しみである。（ルポライター）



渡辺住職はこの四月六日に御忌唱導師をつとめられる。教書を拝受しながら法然上人像へ向かう渡辺住職

表紙のことは

2.3
月

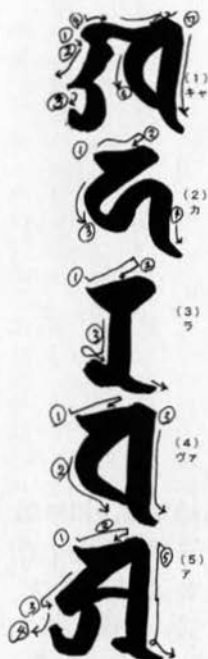
ながし雛

三月三日のお節句に、川や海に雛人形を流す風習が全国いたるところにあった。雛人形とは、まず身の穢れや災いを除き祓うための『呪具』だったのである。節句に限らず急病人が出たときなども急遽流すところもあった。座敷に飾る華美な雛人形の歴史は浅く、江戸中期を待たなければならぬ。今でもお年寄りが、雛人形をいつまでも飾っておくと娘が縁遠くなるなどと苦言を呈することがあるが、それは流し雛時代の名残であろう。いま流し雛を伝えるところは、鳥取の用瀬町、和歌山紀ノ川流域、その上流、奈良の五条市周辺、瀬戸内海北木島などがある。流した雛が和歌山加太の淡島神社に流れ着くという伝承もあり、淡島信仰との関わりが意識されているのも興味深い。

塔婆の梵字の意味するもの(2)

浄土宗の場合

真野龍海



第四番目のヴァ (v) は、水を表します。

このヴァが、筆使い②の時に、上方に上げてしまおうとba (バ) のようになってしまいます。筆記体の「v」にならず英文字の「b」になってしまふからです。この間違いは、よく見かけられるのですが、ヴァは英語のvで、バは英語のbの筆記体と同じで、くると巻く、と覚えておくと間違いません。

このヴァ (va) は、太陽 (virocana) という言葉から作られた毘盧遮那仏、大日如来 (vairocana、太陽のような仏様、光明遍光の仏様の大日如来) の頭文字であるので、毘盧遮那仏、大日如来の種字として、このヴァ (v) で大日如来を表したりします。これはちょうど英語で勝利 (Victory) を表すのにVサインをするのと同じです。

最後第五番目のア (a) は、地を表します。この梵字のa字も図で示したように、右と左に書いた英語の大文字Aと同じです。このように梵語はヨーロッパの言葉と同じ流れに

ありますから、同じような言葉も多いので、それを頭に入れて理解すると参考になります。なお、梵字には英語のように大文字、小文字の別はありません。

以上で塔婆の一つの書き方を説明致しました。表を、上から、宝珠型の所にキヤ(Kya)、半月型にカ(Ka)、三角型にラ(Ra)、円型にヴァ(Va)、四角型にア(A)を書き、裏には、大日如来を表すヴァン(Van)を書く形です。この各形は実際には、書きやすいように日常ご覧のような形になっています。

本来は仏様の供養塔であったものが、石材、木材で、このように形が整えられました。一つには、人間の座っている姿として、上から、頭、首、胸、腹、腰から下、というように形が整えられ、人間を表すとされました。また、一方、キヤ・カ・ラ・ヴァ・アの五つが、人間の要素としての空、風、火、水、地をも現すともされました。これは覚えやすく下から

言うのと、重い順に、地、水、火、風、空で、生命の五大要素とされ、五大ともいわれます。したがって、塔婆は表は人間を現し、さらに、裏返せば、バックは大日如来、仏を現すヴァン字があつて、仏に抱かれていた姿です。

このように塔婆は、表は一人間なれど、裏は、バックは大いなる仏様に懷かれていた姿と見るべきでありましょう。また同時に、この一人間が阿弥陀仏に懷かれ浄土往生の姿と拝むのであります。

私はある時、法要中、お子さんの声を聞きました。「あの鳥みたいなのはなに？」というものでした。そこで、気がつきました。それは、キリク梵字のことだと。反省させられました。梵字の塔婆を書くが、参詣の方々には、あまり説明していない、と。せっかくお子さんが興味を示しているのであるから一言言えば結縁になることだと思いました。

「統合医療」という

第三の道

CAMU Net / 代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

近代西洋医学と代替医療。この論理も方法論もまったく違う二つの医療を統合し、「第三の医療」を目ざそうという動きが近年になって出てきました。その呼び名もストレートに「統合医療」といい、これも潮流のもとアメリカ力です。

この分野の第一人者が、『人はなぜ治るのか』や『癒す心、治る力』などの著書で知られる米国アリゾナ大学医学学校のアンドルー・ワイル博士です。アメリカにおいては本を出せばたちまちベストセラーになるし、博士のインターネット・ページ「ワイル博士に聞け」は世界中から一日三十万件ものアクセスがあるといわれるほどの有名人ですが、いまや日本でも代替医療関係者や代替医療に関心ある人たちにとって、スーパースターの存在と

なっています。

それはさておき、そのワイル博士がアリゾナ大で若い医師たちを対象に開いているのが、この新しい医療を実践を通して学ぶという「統合医療プログラム」というコースで、このコースに日本人として初めて参加し、修了した医師に山本竜隆さんがいます。山本先生は聖マリアンナ医科大学の予防医学教室助手時代、同大内に「代替医療研究会」をつくり、さらには大学の講座に「代替医療」というプログラムを立ち上げるなど、早くから代替医療に関心を深めてきた若き医師です。

そして昨年七月、自身が学んできたことを実践し、また後に続く人たちを育てたいということから、応援・賛同する人たちを得て、東京・四谷に「統合医療ビレッジ」

というクリニックをオープン、チーフプロデューサー兼院長として活動を始めました。

基本的な方法としては、診断や検査などには科学的に優れている西洋医学の技術や装置を用い、治療には西洋医学が向くものには西洋医学を、そうでない方がいいものにはさまざまな代替医療を組み合わせる——というもので、同クリニックの療法メニューをみると、鍼灸・漢方、ホメオパシー、アロマセラピー、リフレクソロジー、インドの伝統医療アーユルヴェーダー、心理療法のサイモンソン療法等々が並んでいます。

一方、東京女子医科大学にも有志たちとともに研究会をつくり、代替医療の勉強を続けてきた若い医師がいます。川嶋朗さんです。そして、その甲斐あって昨年六月、東京・青山に「東京女子医大付属青山自然医療研究所クリニク」がオープン、所長として統合医療の実践を始めました。自然医療とは代替医療のことですが、川嶋先生によると代替医療ではまだ理解されづらいので、そう名付けたとのこと。このクリニックにはまだお邪魔したことがありませんが、基本的には山本先生の統合医療ビレッジと同じ考え方だと思います。というのも、山本先生と川嶋先生は日本に統合医療を根付かせているとする同志的なおつき合いがあるからですが、ともあれ

大病院の中に代替医療を中心としたクリニックができたのは初めてで、画期的といつていい出来事でした。

ちなみに、山本先生はまだ三十代後半、川嶋先生は四十代前半です。いまだ代替医療など歯牙にもかけない医者が大半の医学界の中で新しい潮流をつくり出すのは、やはり若い世代なのだなと思わずにはいられません。

一月末に東京で「国際統合医療専門家会議」という催しが開かれ、ワイル博士も招かれたのですが、その効果もあつてか立ち見が出るほどの盛況ぶりだったといえます。

しかし、だからといって私たちカムネットはその盛況を手放しで歓迎しているわけではありません。というのも、山本・川嶋先生たちは別として、代替医療がどんな生命観や健康観に立脚しているのか深く理解することなく、「人気があるらしいから取り入れてみるか」「儲かるなら統合医療というやつをやってみるか」程度の医師たちがまだまだ大半のように見受けられるからです。そもそも西洋医学と代替医療は対立する概念です。統合医療はそれを止揚しようというのですから、ことは簡単ではないはず。そのためにも私たちは、さらに「代替医療とは何か」にこだわっていききたいと思っています。

連載

会いたい人
関 容子

安野光雅
さん
①



東京・池袋のじゅんく堂書店で期間限定で開かれた「光雅堂書店」前で



安野光雅最新刊『青春の文語体』
筑摩書房刊

安野^{あんの}さんの微笑をたたえた茶色い眼と、幼児のようにやや小肥りの体型は、いたずら好きの妖精を思わせる。だから中世からでも吹いてくるみたいなそよ風に乗って飄飄と街に現われたりすると、靴の爪先がそり返ったりはしてないか、とつい足許に眼が行ってしまふ。

画家で絵本作家で文筆家だが、絵はほとんどが趣味のいい淡彩で、内容のたっぷり詰まったエッセイも、その画風に似て押しつけがない。先ごろ『青春の文語体』（筑摩書房）という本が出て、相変らずの精力的な仕事ぶりを披露したが、著者サイン会が日本橋丸善で開かれたので、私もその行列に加わることにした。会のあとで、安野さんが言う。

「わたしは島根の津和野の生まれで、森鴎外とは同郷なんです。彼の『斗タ・セクスアリス』に出てくる会話は津和野弁だからね。それでというわけじゃ全然ないんだけど、若いころに鴎外の『舞姫』と『うたかたの恋』と『文使い』という文語体の三部作を読んで、

本当に美しい文章だと思ったのね。それから文語体の本を読みあさるようになって、そのうちに鳴外が文語体で訳したアンデルセンの『即興詩人』に出会ったわけよ。わたしの場合、本のストーリーというより、音楽のように心地よく展開して行く文章の美しさに感じ入ったんですね。まだ若かったから、つかえつつかえ読むんだけど、峠を越したらわかってもらわなくてもどんどん読めるようになった。何度も読むうちに、これがわたしの無人島に持って行く一冊、になったんだよね」

『即興詩人』の中でも安野さんのとりわけ好きなのところは、「恋せよ、我が命なお明日あるを知らん」という一節。

「これ、へ命短かし恋せよ乙女……じゃないの？　と思ってるね。そのころは自分がそれ発見したような気になって、吉井勇の『ゴンドラの唄』の原点はここにあるんだな、と思った。でも別にこれはわたしの発見じゃなくて、吉井勇も自分でそう言ったらしいんだけど、

それからこれが誰かに『即興詩人』をすすめるときのわたしの手口……というか、常套手段になったんだね。しかし世の中には同じ考えの人がゴマンといて、主として明治生まれの人ですけど（笑）、小泉信三さんがやはり無人島の一冊にこれを挙げてお嬢さんたちに読めとすすめたとか、須賀敦子さんのお父さんもこれをすすめたとか、またかなり前に山田風太郎さんも無人島に持っていくならこれ、と書いてたのを読んで嬉しくなっちゃってね。わたしも実は同じなんで、そうおっしゃる山田さんの作品を読んでみたくなりまして、御返事はいりませんから、って葉書を出したことがあるの。そしたら亡くなったあとで、この間世田谷区主催で山田風太郎展が開かれて、あなたの葉書をこれに出品していいか、と問合せてきた。よくまあ、山田さんがその葉書を長いこととっておいてくれたものだ、と感激しましたけどね」

文語体の文章の魅力は、その気負いの大き

安野さんの故郷、津和野の昭和初期の頃の写真



鷹の舞



津和野小学校

さ、志の高さ、訴える気概の強さにあるという。考えてみると、まず子供のころに毎日のように耳にした文語体は、お父さんが声に出して読み上げる新聞だった。

「親父は宿屋をやってましたからね。津和野の町の小さい宿屋。それで毎朝、お客さんや、近所の字の読めない人に新聞を読んで聞かせるわけですよ。面白いリズムがあつて、ときどき合の手に、サテサテ……というのが入る。尻上りで、サテサテ、つてね（笑）。これが愉快で、聞くとともに毎日に聞いてた」

安野さんのエッセイに、森の石松は遠州森の福田屋という宿屋の倅、グスタフ・マーラーもチェコスロバキアの宿屋の倅、じつはわたしも石州津和野の宿屋の倅……という倅くたりがあった。

「親父の朗読のし方はね、落語の『浮世床』で、知ったかぶりしてみんなに読んで聞かせる男がいるでしょ。まああんな調子でしたね。十郎左衛門が、というのを、ジフラフザエモンが、とかいうやつ（笑）。二尺六寸の大太

刀を……そんな短いの？ いや、これは横巾なり。それじゃ向うが見えないよ。ところどころおに穴をあけ、そこに金網を張り、暇なときにいは餅を焼き……つて、まさにあのリズムで読んでたね」

新聞の音読と言えば、『シラノ・ド・ベルジュラック』の最終場面。修道院にいる従姉妹のロクサアヌのために毎週シラノが新聞の朗読にやつてくる。見出しが文語体で、まるで詩のようだ。

「そうね、然り然うして某月某日、シラノ・ド・ベルジュラック氏、暗殺さる……なんてね。あれ、口語体でやられたらうつとりしないよね。口語体は、意味は直接伝わりやすいけれども、志は文語体のほうが強く伝わる。たとえば中江兆民は、平和が続いているということを、一塵いちじんも立たず……と言ってるんだ。間接的な表現なのに、かえってイメージが鮮明に伝わるからすごいよね」

安野さんと絵との出会いも、父親が営む津和野の「小さい宿屋」からだった。

ロンドンでの一枚



「親父は不思議な人で、流れ流れて津和野へ来て、そこの大店の娘と、できちゃったわけね（笑）。それで別に小さな宿屋をやることになって、子供が三人生まれたけど、その大店の娘は早く亡くなって、わたしと弟は後妻に生まれた子です。わたしは親父が四十八のときの子だから、もう物ごろついたときにはかなり年取ってましたね。あるときこの父親が、近所の店じまいのせり売りで大量の水彩絵の具を買ってきた。それをどうしたかと言えば、わたしは一つ一つ味わってみて、赤が一番旨い、とか、緑も悪くない、とか言ってる、今思えばカドミウムや水銀が入ってたと思うんだけど、この絵の具の毒氣にあてられて（笑）、絵描きになったのかもしれないね」

津和野の冬は寒いので、光雅少年は枕屏風を立てて寝た。貼り混ぜの屏風には、扇面の形の中にさまざまな絵があった。

「絵をじつと見るのが好きだった。枕屏風の絵をあんまり見つめていたせいか、その後扇

面の絵が嫌いになった（笑）。富山の葉売り
が置いて行く、食べ合せの注意書なんかでも、
鰻と梅干しとか、蟹と氷水とかの絵があつて、
それを穴のあくほど眺めてましたね。宿屋の
泊り客が読みさしを置いていく雑誌、という
のも有難いもので、『改造』という雑誌で谷
崎潤一郎の『卅』を読んで妖しい世界にびつ
くりしたことがあるんだけど、その前に小学
校五年生くらいのときだったかな、雑誌の挿
し絵で、この世の人とは思えないほどの美少
女の絵を見て感銘を受けた。でも見ちゃいけ
ないもののような気がしたからすぐにパッと
本を閉じて、またしばらくすると恐る恐るそ
のページを開いては、パッと閉じる。そんな
ことをくり返した。思えばあれがわたしの物
ごころのつき始め、つてことになるのかな」

安野さんはなぜ扇面の形が嫌いなのだろ
う。これも安野さんのエッセイで知った話だ
けれど、オーストラリアで日本の絵画の展覧
会が開かれたとき、通りすがりのトラック運
転手が入ってきて、一枚の絵の前にじっと立
ちつくしてしきりに感心していた。その絵は
扇面の形の中に描かれた風景画で、この絵の
着想は実に素晴らしい、これは雨の日の車のフ
ロントガラスのワイパーの跡から見える風景
なんだね……と言ったとか。

「アハハ、そうそう。それはテレビの吉田直
哉氏から聞いたんだけど、面白い話だね。わ
たしがなぜ扇面の形が好きじゃないかと言え
ば、扇面の両端が要のほうへ向う重力の方向
に違和感があるのと、何もわざわざあの形の
中に絵を描かなくてもいいじゃないか、とい
うだけのことよ。しかし好きとか嫌いとか、
美とか醜とかいうのは理屈じゃないんでね。
美しいと感じる感覚は、こっちの心が動かさ
れるかどうかなんだと思う。感性のあり方な
んだね。美は対象に備わっている美しさより
も、それを見る自分の感性の責任なんですよ」

見る側の感性という点では、あるとき安野
さんがフランスのコルマールの教会で見た祭
壇画のキリストは、おできや腫れ物だらけだ
ったという話だが、われわれはそういう醜惡

な作品をどうとらえたらいいのだろうか。

「ああ、グリユーネヴァルトという絵描きが描いたキリストね。絵に限らず金子光晴の『大腐乱頌』にしたって、絵描きや詩人が醜惡な物の中に何を見ているのか、何を訴えかけてきているのか、それをこっちの感性で受けとめればいいのでね」

いずれ安野式美意識についてはゆっくり語っていたくつもり。

ところで、安野さんにさまざまな形で影響を及ぼしたユニークな津和野のお父さんは、七十二歳で亡くなった。男の人にとって、父親の没年齢というものはかなり気になるものらしい。

「親父は六十八のとき病氣になって、その後体がきかなくなるヨイヨイになって四年間いて、七十二歳で亡くなったわけだから、わたしも同じような運命をたどるのかとずっと思ってた。そしたら『街道を行く』でも仕事を組んだ司馬遼太郎さんが七十二で亡くなつて、あのときはある種の感慨を持ちましたね。そうして見ると、棟方志功さんも七十二で亡くなるし、『アルプス登攀記』を書いたウインバーも七十二だし、ジョン・ウエインも七十二なんだね。しかしまあ、何事も起らずにここまで来てるから、あとは余分と思つて、ますます好きなことだけに専念しようと思つてます」

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替0018002145231

露の身は ここかしこにて 消えぬとも 心は同じ はなのうてなぞ

法然上人「讃岐流罪の折九條兼実が詠める歌への返歌」

朝露のようにはない私たちのこの身が、いったい、いつどこでその終わりを迎えることになるのかは誰にも分かりません。しかし、たとえこの世での命を終えたとしても、阿弥陀さまのお浄土への往生を願ひ共々にお念仏を称えていた《私の心》と《あなたの心》が、お浄土の蓮の台で必ずお会いできるのは疑いのないことです。

心と心——割り切れぬ思い——

「もし、もう一度お子さんの臓器を提供する機会を得たならどうしますか」と尋ねると、「もちろん提供します」と浩子さんは即答した。その後で、ややためらいがちに「心を失えば、天国で私たちのことを忘れてしまうから」と、「心臓の提供には拒否したい」と打ち明けた。（登場するドナー家族は仮名）

（平成十二年十月二十六日『産経新聞』より）

「脳死」を巡る議論が社会的問題となり、平成九年、臓器移植法が施行されました。法案成立後もその議論は絶えず、とりわけ、「脳死」となった小児からの臓器提供については、本人の意思表示など、難問が山積し、今でも尽きることなく議論が続いています。そうした状況を踏まえ、数年前、「ドナー家族を訪ねて——小児移植を考える——」という新聞紙上での連載がありました。法律上、「脳死」からの移植は叶わなくとも、心臓停止後であれば小児からの腎臓提供は可能で、年に数例ではありますが、わが国でも行われています。新聞の連載は、わが子の腎臓提供を承諾した数件のご家族の心情を追って構成されてきました。ここで引用したのは、四歳三か月で悪性脳腫瘍で亡くなった長男・剛君のお母さん（浩子さん）と記者とのやりとりで、連載第一話の締め括りの一節です。

その紙面には、剛君がまさに亡くなっていく様子も、次のように記されていました。

三月十九日の夕方、浩子さんが病院のベッドで添い寝していると、剛君の体が硬くなっていくのが分かった。おかしいと思い、体をさすると少しやわらかくなった。でも、五分とたたないうちにまた硬くなっていった。「ママ」突然、大きな声をあげた。それが最期の言葉だった。三時間後の午後九時三十分、剛君は亡くなった。浩子さんは「最期に自分を呼んでくれたことで、とてもなくさめられた」と振り返る。(同前)

その後、浩子さんは、反対する親戚の声に思いを揺るがせつつも、わが子の腎臓提供に踏み切りました。しかし、女兒に移植された腎臓は、移植後一か月で拒絶反応が出て、二か月後には摘出されたそうです。

さて、私はここで、臓器提供の是非について論じるつもりも、また、そんな資格もありません。ただ、思いを馳せていただきたいのは、わが子の腎臓提供まで決断された浩子さんの中にもある、合理的には決して説明し得ない、なんとも複雑で割り切れない、ありのままの「心」の姿です。

なるほど現代人は、それがたとえ小学生でも、「心臓」が全身に血を送り出す、言

つてみれば、ポンプの役割を果たしていることを知識として承知しています。昔の方が考え、その漢字にもあてられたように、私たちの「心」の働きをそのまますべて「心臓」の役割としてあてはめようとする現代人など、まずいないでしょう。無論、浩子さんもその例外ではないことが「ややためらいがちに」という一節から自ずから知られます。

とはいえ、それこそ「頭」の中ではそうしたことを十分に理解してはいても、「心」を失えば、天国で私たちのことを忘れてしまうから」と、「心臓の提供には拒否したい」と仰る浩子さんの思いを一笑に付すことなど、誰にもできはしないのです。なぜなら、浩子さんのこうした思いは、最期に「ママー」と声をあげてくれたわが子・剛君に向けた「心」からの叫びであり、それこそ誰しもに共通する、へかけがえない大切なあの方への「心と心のふれあい」を決して失いたくはないという願いと共に鳴るからです。

八〇〇年前に詠まれた法然上人の冒頭の和歌が、決して色褪せることなく、尊く歌い継がれていく由縁はまさにここにこそあるのです。

合掌

(大正大学講師・林田康順)

法然上人を
めぐる人々

一の谷序章



◆第五回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

（十三）

「だが、それにしても左中將殿はなぜ入水されたのだ」

と宗盛のことばに対して教盛は、強い語調でそういうと、

「われらが思いますのに、どうも小松殿御一家の方々は心が弱い。太宰府で緒方三郎維義の謀反に会って、みな心が動揺したのは事実なれど、まだ頼朝の軍勢とは向かいおうてもおらず、西国一帯にはまだまだわれらに心を寄せる武者たちも多いというに、なぜ早々にわれらが家運に見切りをつけて、死なねばならなかったのか」

「いかにも、早まりましたのう」宗盛がいった。

そのことばを受けて教盛は、

「しかし、それが小松殿一家の方々というものでござろうよ。都落ちにも、何刻なんときもおくれ

てわれらに合流された。御当主の維盛殿などは、都に残す妻子との別れを惜しんで合流の時刻におくれたということであつたが、われら一門はみな妻子をひきつれ、それだけの覚悟をして帝みかどに従い、西海に赴いたというに、小松殿の方々は、ちと覚悟のほどがちがうておりまする」

「しかし、合流の時刻におくられたとはいえ、ともかくわれら一門のあとを追うて西海への行を共にされた」

と人のよさそうな笑みをうかべて宗盛は、
「都落ちの方々のなかに小松殿御一家の姿がみえず、別行動をとられたか、と思うたときは真実心細うなり申したが、淀の辺に来て、追いついてこられたときは、心強うも何とも、まことにうれしうござつたよ」

だがその宗盛に対して、教盛は怒りをにじませた語調で、

「西国への帝の行幸には遅参する。柳ヶ浦で

（十四）

はわれらから離れて一人死に急がれる。小松殿の方々は容貌、姿みな美しく、舞い姿のあまりの美しさをみては院まで感涙されたほどであったが、今のこの戦陣にあつて、美しいだけでは何の役にもたちませぬ」

太宰府で緒方の三郎の謀反をしらされ、人々みな死にもぐるいで宮崎へ逃げのび、そして柳ヶ浦に飯屋をつくつてひと息ついたのが去年の秋。

その日から今日までの約半歳。柳ヶ浦から屋島に本拠地を定めて態勢をたて直した平家は、西国一帯の武者をかり集め、山陽道八カ国、南海道六カ国、都合十四カ国を支配下におさめて、今、福原まで攻めのほつて来たのであつた。

その十四カ国の平定に、勇猛果敢、功績絶大な戦勝をなしとげたのが、教盛の次男教経である。

わが子の働きによつて、一門ここまでまとまり、西国の武者たちを一つにまとめて都に近い福原まで攻め上つてきた、という思いが教盛にはあつた。

いや、戦陣にあるという覚悟のほどは、子息教経ばかりでなく、教盛自身にも他の一門の誰にもまして強かつた、といつてよい。

きのう二月四日、清盛祥月命日の供養がおこなわれたときである。

屋島から安徳帝も行幸されたこととて、ことのついでに平家の人々は除目（じゆもく）（任官の儀式）をおこなつたのであつた。

この除目で都落ちに同行した一門の人々はみな、官職のなかつた者は官職につき、官職についていた者たちはみな昇進した。

空しいといえは空しい官位昇進の儀式である。

除目は通常、天皇の臨席のもと、清涼殿の御座の間でおこなわれるきまりであるが、彼らがこのときおこなった除目は、都の清涼殿ではなくて福原の青空の下である。安徳天皇の臨幸があったとはいえ、都ではすでに後鳥羽天皇が即位しており、朝廷の実権は後白河法皇が握っている。

加えて彼らは今、源氏の大军との激突を前にして戦陣のさなかであって、明日しれぬ命のなかにおかれている。

のどかに除目などをして官位昇進をよろこんでいるような情勢ではおよそないのであるが、そこが平家というべきなのであろう。一門の多くの人々がこのときの官位昇進をよろこんだ。

教盛はこのとき、中納言から正二位大納言に昇進する旨の知らせを総大将の宗盛から受けたのである。

だが教盛は辞退した。数日後には源氏の本

隊との戦闘がいよいよ始まるというのに、官位昇進を単純によろこび、それに心を奪われているとき一門の人々が情けなかった。

官位云々ではなく、今は源氏との戦闘に心身を傾注すべきではないか。

教盛は官位昇進の知らせをもって来た使者に、ただ一首、和歌を詠んで宗盛に届けさせた。

今日までもあればあるかのわが身かは

ゆめのうちにも ゆめを見るかな

今日までよくも生き永らえて来たものだ。一切がふしぎな夢をみているようにも思われるが、そんなわたしにとって、官位昇進など何の意味があろう。夢のなかにまた夢をみているようなものではないか。

その教盛にとって、美貌かぎりなくとも戦場では頼りにならぬ小松殿一家は、口惜しい限りであった。

「いかにも門脇殿のいわれる通りよ」と教盛



中
いんがわ

の怒った語調を鎮めるように経盛は、

「だが、ともかくも今、小松殿御一家の方々は三草の陣についておられる。立派に三草の陣で戦うてくださることを、期待するばかりませぬ」

「戦うてくださらねばならぬ」

と教盛は応じて、

「だが、小松殿御一家の面々をみられよ。頼りになるのはお年は若うても備中守（師盛）だけではござらぬか」

（十五）

とそのとき、外にあわただしく数騎の馬の足音がきこえ、あたりが騒がしくなった。

と思うと、さっと幔幕のところで馬を降りた三人の武者が、

「御注進、御注進」

と叫びながらあわただしく本陣に駆けこんできた。

はつとして宗盛たち三人の視線が武者たちの方に注がれる。備中守師盛とその従者たちであった。

「おお、どうなされた。師盛殿。今ちようどそなたのことを話しておったところであつたが」

宗盛が声をあげた。

みると師盛をはじめ三人の鎧はみだれ、緊張にひきつった面貌である。

「どうなされた」

ひきずられて経盛と教盛も緊張した面持ちで訊ねた。

「面目次第もございませぬ」

宗盛の前に膝をつくとき、師盛は息をはずませて一氣にいった。十七歳の美青年である。

「われら小松家にお委せただいておりました三草の陣、敗れましてございます」

「何、何といわれた」

突然の師盛の注進に、さすがの宗盛も度を

失い、思わず、手にしていた蜜柑を手から放すと床几しょうぎから起ち上った。

平家では、小松家の人々に三千余騎の武士をつけて播磨の三草山の西の山口をかためさせていたのである。

作戦上平家は、この三草山を、山陽道の平家方武士たちと呼応させ、丹波路から都へ進攻する前線基地として重視していた。その前線基地が敗れたというのである。

あわてた、というよりも宗盛は茫然とした思いであつた。一体どうすればいいのか。

「いかにして敗れたぞ」

「で、源氏は今、どこに向かつておるのか」
経盛と教盛も床几から起ち上がり、それぞれ訊ねた。声が震えている。

師盛の報告によると――。

その日、二月五日早暁四時、平家三千の武者たちは、合戦はおそらく明日であろう、戦さも寝不足では思うように働けない、よく寝

て明日の戦さに備えよう、というわけで、ほとんどの者が兜を枕にしたり、鎧の袖や箆えびら（矢を入れて背負う道具）などを枕にして前後もしらず熟睡していた。

と、そこへ義経率いる源氏一万余騎の大軍が、どっと関との声をあげて押し寄せたのである。

平家の武者たちは慌てに慌てた。

そして、

「弓よ」

「太刀よ」

「刀よ」

と騒いでいるうちに、源氏の大軍はそんな平家の陣をざざっと駆けやぶり、蹴散らし、矢を散々に射かけ、平家方は多数の死者を出して総崩れになった、というのである。

「して、兄君たちはいかがなされた」

と教盛が訊ねた。師盛は小松一家の末弟である。三草の陣が敗れたのであれば、ここは当然のことながら、三草の陣の大將である師盛

の次兄小松の新三位中将資盛が注進に来るべきではないか。

「新三位殿はいかがなされた」

教盛は重ねて訊ねた。「大本陣に御舍弟の師盛殿が注進に来られたとは、兄君たちは御負傷なされてか。それとも御命に——」

「面目次第もございませぬ」

師盛は顔を伏せた。

「御無事か、それとも——」

教盛が訊ねた。

「兄たち三人とも無事にございます」

と師盛は顔を伏せたまま、

「高砂より船に乗りまして屋島へ逃れました。途中、大本陣の内大臣殿（宗盛）のもとへ、われらが御注進に参るよう、兄たちの命をうけて、若輩ながらこの師盛、御注進に駆けつけましてございます」

（つづく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウオッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM
浄土の広場

●盤

〔特選〕

盤据えて碁敵を待つ二日かな

片桐てい女

題が題だけに囲碁将棋の句が多かった。この句、元日はさすがにそれどころではなかったが、二日になるともうむずむずしてきたのだらう。同病の友を待っているのである。天下太平の見本のような句だ。

〔佳作〕

水盤に生けし白百合句いけり

今井 恵子

盤上一手びしりと指の反る炉端

野島 弘毅

千し蛸の吸盤を見て競り落とす

石原 新

●光

〔特選〕

逆光のごろりと黒き南瓜かな

結城 篤志

その場所は読者に任されているから、畑とするのもよいが、家のどこかに置くほうが生きるように思う。土間か板の間に座っている

様子が、上・中の句によつてはつきり見える。
存在感のある南瓜になった。

〈佳作〉 元朝や吾妻嶺に待つ御来光し

中島富士子

一陣の風に浮き葉の光り合つ

細田 初枝

特急の赤灯光り橋越える

加藤 政男

●自由題

〈特選〉 お似合いのひと言に買つ冬帽子

寺下 忠至

買おうと思つてというより、何となく入つたのだらう。あれこれ手にしてみたりかぶつたりしていると、そのうちの一つをよくお似合いですと言われる。こういうひと言には誰も弱いものである。

〈佳作〉 マスクして入院の夫見舞いけり

金谷 友江

擦り切れし畳に冬日射しにけり

山口 信子

名残りの蚊しげく攻め来し寝入りばな

島谷ときを

参加作品.....編集部選

盤

冬ざるる盤石に立つ古城かな

浜口 佳春

北風吹くや円盤投げの練習場

佐藤 まり

水張る盤死者の着物に木の葉散る

山口 信子

冬ごもり基盤に白黒石並べ

加藤 政男

盤石の山門完成天高し

細田 初枝

光

冬の日の覗くや空家へ光りきよす

山口 信子

飛び立って鴨は光りの中にあり

浜口 佳春

神宮に光彩放つ冬至かな

井村 善也

日の光蹴り上ぐる児に縁ぬくし

石原 新

初霜の屋根の瓦の光りかな

小林 恵美

枯菊に残る微光も括りけり

片桐てい女

暮れて猶光り保てり金閣寺

佐藤 雅子

自由題

山峡の水生きいきと蕎麦の秋

大西 明子

大仏殿銀杏大樹の影長し

谷 しげ子

母の忌に一品足しぬ菊なます

増田 信子

名残り蚊のしげく攻め来し寝入りばな中村 真一

野仏は枯れ葉の中に埋もれぬ 西井 正

庭掃除掃てこずる濡れ落ち葉 中村 真一

枯れ落ち葉色彩々に重なりぬ 東 保

柿の実も一つを点し海暮るる 河合富美枝

枯園にひっそり在はす道の神 中島富士子

浄土誌上句会のお知らせ

題

③季語ではありません

遊気

自由題

締切・二〇〇四年三月二十日
発表・『浄土』二〇〇四年五月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

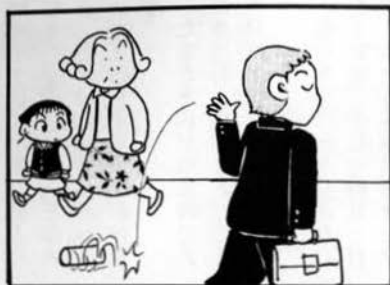
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんはネッ

8 かい目

かまちひろう



ガマの前往時を偲び冴え返る 岱潤

四〇〇年前、はからずも沖繩（琉球）に渡り、時の琉球王をはじめ多くの人に浄土の教えを伝えた学僧袋中上人を慶讃する記念法要と、先の沖繩戦戦没者への追悼法要のために筆者も東京教区の沖繩団参に同行した。

法要の前日、たまたま宿が残波岬であつたので付近の読谷村を探索した。ここは沖繩戦の時本島にアメリカ軍が最初に上陸した場所で、丘の上から見た海は、その時一五〇〇艘の艦船で海が見えなかつたと伝えられている。そして四月一日陸上戦の作戦をとった日本軍が引き上げた浜に、アメリカ軍は無血上陸をした。その数一八万余人、読谷村は虱潰しに搜索が行われ、森の中のガマ（鍾乳洞）に

隠れていた村民が発見された。そしてひとつのガマでは村民の集団自決が行われ、もう一つのガマでは全員が捕虜となつて助かつている。集団自決といつてもその半数は母親が自らの子を殺害しての自決である。

今回その二つのガマを探し、両方ともなんとか見つけることが出来た。二つのガマでその生死を分けたのは何だったのか、それは調査の結果、学校で皇民教育を徹底的に学んだ者がいたガマと、貧困の中ハワイに移民で渡つた者がいたガマの違いであることがわかつている。

戦争の悲劇は教育の恐ろしさをも伝えている。沖繩戦の追悼に、国のために死んだという言葉は、事実であつても哀しい言葉に聞こえてならなかった。（長）

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(両館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十巻二・三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年二月二十日

発行 平成十六年三月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八・六九四七

FAX 〇三・三五七八・七〇三六

振替 〇〇・一八・八・八二八七

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>



昭和42年2月号



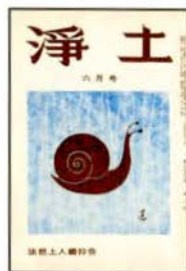
昭和42年3月号



昭和42年4月号



昭和42年5月号



昭和42年6月号



昭和42年7月号



昭和42年8月号



昭和42年9月号



昭和42年10月号



昭和42年11月号



昭和42年12月号



昭和43年1月号



昭和43年2月号



昭和43年3月号



昭和43年4月号



昭和43年5月号

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm

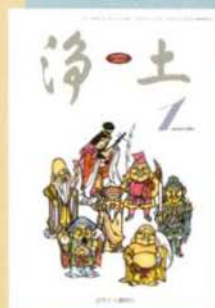


選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円

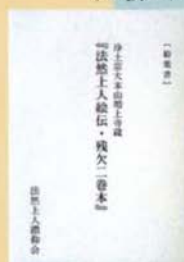


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブツダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036